様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　４ 月　４ 日現在

機関番号：３４５１７
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１８３２２

研究課題名（和文）ギリシアの中期ビザンティン聖堂建築における絵画の配置による空間構成の分析

研究課題名（英文）Analysis of the Spatial Composition with the layout of the Christian Art in the Middle Byzantine churches in Greece

研究代表者
猪股　圭佑（Inomata, Keisuke）

武庫川女子大学・建築学部・准教授

研究者番号：００６３４８５９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：ギリシアの中期ビザンティン聖堂建築の代表作であるオシオス・ルカス修道院聖堂、ダフニ修道院聖堂、ネア・モニ修道院聖堂における実地調査を行い、聖堂内部の3次元モデル、断面展開図、アイソメトリック図、天井見上図及び合成写真を作成した。これらを用いて壁画の主題及び配置による空間構成を分析し、壁画が配置された空間の意味を明らかにした。本研究成果は日本建築学会大会学術講演会、日本建築学会計画系論文集において発表している。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究ではギリシアにおける中期ビザンティン聖堂建築において壁画の主題及び配置による空間構成の分析、考察を行い、建築と壁画の総合によって神聖な宗教的空間が創造されたことを示し、その空間構成における重要な特徴の一端を明らかにした。今回作成した3次元モデル、壁画をレイアウトした図面はビザンティン聖堂の研究における客観的な検証手法の一つとなり得るものであり、貴重な文化遺産の保存にも繋がると考えている。

研究成果の概要（英文）：I surveyed masterpieces of Middle Byzantine architecture, namely, Hosios Loukas, Nea Moni and Daphni, and created three-dimensional images, interior elevations, interior views of the ceilings, isometric drawings, and photomontages. I then analyzed the spatial composition of the paintings to clarify the significance of the architectural space with the theme and layout of the paintings. I presented this study in Summaries of Technical Papers of Annual Meeting, Architectural Institute of Japan, and Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ).

研究分野：建築史

キーワード：ビザンティン　壁画　装飾プログラム　オシオス・ルカス修道院聖堂　ネア・モニ修道院聖堂　ダフニ修道院聖堂

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

建築空間において壁面や天井面は純粋な内装仕上としてあるだけではなく、本来は空間全体を装飾するものとしての重要な意味を持っていたはずである。ビザンティン聖堂建築では、どのように神聖な宗教的空間が創造されていたのだろうか。「建築と絵画がどのような意図に基づき一体的に計画されたのか」が本研究の問いである。
ビザンティン帝国は 1100 年に及ぶ歴史を誇り、地中海周辺の広範囲に渡る地域に文化的影響を及ぼした。西ヨーロッパが世界建築史及び美術史の主流であると従来認識されてきたが、ビザンティンの文化は西ヨーロッパのそれと並置されるべきもので、現代における異文化理解の視点に繋がる極めて重要な領域といえる。しかし、現存するビザンティン聖堂建築やその図像史料、叙述史料が極めて少ないこともあり、個々の聖堂建築における絵画による空間構成についてはこれまで十分に検討されていない。ビザンティン聖堂建築では建築と絵画が不可分の関係にあって、絵画の主題とその配置、個々の図像も含めその全てが空間を構成する重要な要素である。モザイクやフレスコは単純な装飾ではなく、各部位のオーダー、高さや奥行きの物理量などと同様に空間設計上の意図を持って計画されている。ビザンティン聖堂建築の空間構成を分析するためには、建築だけでなくそこに描かれた絵画を含めて検討する必要がある。ビザンティン聖堂建築には基本的に西に出入口、身廊東端にアプシスがあり、その空間構成は西から東への強い方向性を持つ。そのため聖堂や礼拝堂が増築される場合、南北に複数の聖堂や礼拝堂が併設され、結果的に非整形で複雑な平面になることが多い。中期以降のビザンティン聖堂建築における重要な特徴は、増改築によって複数の聖堂や礼拝堂が接続した場合に個々に異なる複雑な平面が構成されることと、聖堂建築が儀礼を行う場であるだけでなく関係者の墓所を兼ねる場合が多いこと、さらに墓所を設けることが増改築の目的にもなっていることと考えられる。このように儀礼を行う機能的な空間でありながら内部に墓があり、増改築によって複雑な平面を持つビザンティン聖堂建築の空間構成の特徴を、建築あるいは絵画のみの分析によって明らかにすることは難しく、それには建築と絵画の統合的な理解が必要である。絵画を含めた空間全体を図式化し、ビザンティン聖堂建築の空間設計上の意図を明らかにする研究は応募者を除きこれまでになく、建築史及び美術史それぞれの分野に限定した研究では得られなかった新たな知見をもたらすと考えられる。

２．研究の目的

本応募研究課題ではギリシアの中期ビザンティン聖堂建築の代表作と称される 3 聖堂、すなわちオシオス・ルカス修道院聖堂、ダフニ修道院聖堂、ネア・モニ修道院聖堂における実地調査を行って、キリスト教絵画の主題及び配置による空間構成を分析し、建築と絵画の統合的理解を試みる。絵画を含めた空間全体を図式化して建築的空間の意味を解釈し、絵画の主題と配置によってどのように空間全体が意味づけられ、神聖な宗教的空間が創造されたかを知り、複雑な平面を持つビザンティン聖堂建築の空間構成における重要な特徴の一端を明らかにすることに意義がある。
多くのビザンティン聖堂建築では剥落あるいは人為的な破壊によって絵画が現存しない状況にある中で、これら 3 聖堂については絵画の保存状態が非常によい。
(1)ギリシア・フォキス　オシオス・ルカス修道院聖堂
オシオス・ルカス修道院はギリシア・フォキスにあり、設立は 10 世紀末と考えられている。まず内接十字式のパナギア聖堂（聖母聖堂）が建てられ、その後十字式の平面にスキンチ上のドームを持つカトリコン（主聖堂）とクリュプタ（地下礼拝堂）が増築された。内部のモザイクやフレスコもこの増築と同時期に描かれたとされている。地上階はパナギア聖堂とカトリコンが接続した平面で、接続部分に聖ルカスの墓があり、2 階廊や小礼拝堂などを含む、全体として非整形で複雑な平面である。聖人の墓と絵画によって意味づけられた建築的空間が形成されていると考えられる。
(2)ギリシア・アテネ　ダフニ修道院聖堂
ダフニ修道院聖堂はアテネ近郊にあり 1100 年前後の設立である。十字式の平面にスキンチ上のドームを持ち、四隅はそれぞれ小礼拝堂となっている。中期ビザンティン聖堂建築に特有の平面を持つ代表的な聖堂の一つとされる。物語図像が数多く描かれており、建築と絵画との関係を検討する上での好例である。
(3)ギリシア・ヒオス　ネア・モニ修道院聖堂
ネア・モニ修道院聖堂はエーゲ海の東部、ヒオス島にある。設立は 1055-56 年頃で、当時の皇帝コンスタンティノス・モノマコスが献堂者とされている。ほぼ正方形の平面の上に八角形の鼓胴部、その上に背の高いドームがある。西から東へと向かう空間を基本としながらも垂直性が極端に強調された建築的空間が、絵画の配置によってどのように意味づけられていたかを明らかに

する。

３．研究の方法

ギリシアにおける中期ビザンティン聖堂建築の実地調査を行い、空間の全体観を把握し、全ての絵画の写真、さらに各室全体の写真をアングルを変えながら撮影する。撮影した画像データを用いて聖堂内部の 3 次元モデル、断面展開図、アイソメトリック図、天井見上図及び合成写真を作成し、壁画の主題及び配置による空間構成の分析を行って聖堂建築における壁画が配置された空間の意味を解釈する。

４．研究成果

2018 年 8 月にオシオス・ルカス修道院聖堂、ダフニ修道院聖堂、ネア・モニ修道院聖堂の実地調査を行い、写真撮影を行った。撮影した画像データにより作成した 3 次元モデル、断面展開図、アイソメトリック図、天井見上図及び合成写真を用いて、壁画の主題及び配置による空間構成の分析、考察を行い、建築と壁画の総合によって神聖な宗教的空間が創造されたことを示し、その空間構成における重要な特徴の一端を明らかにした。本研究成果は日本建築学会大会学術講演会、日本建築学会計画系論文集において発表している。今回作成した 3 次元モデル、壁画をレイアウトした図面はビザンティン聖堂の研究における客観的な検証手法の一つとなり得るものであり、貴重な文化遺産の保存にも繋がると考えている。
オシオス・ルカス修道院聖堂では、墓や出入口、壁画について検討し、壁画の主題及び配置による空間構成の分析、考察を行った。10 世紀後半には聖バルバラ聖堂の出入口は南にあり、エウクティリオンでは南から入って正面にあたる、1 階または地下クリュプタ奥の北腕においてルカスの墓（遺体）が祈念されていたが、遺体の移動と二聖堂の増改築及び接続、さらに壁画の配置によって、当初の聖バルバラ聖堂とエウクティリオンにおける南出入口から北のルカスの墓へ向かう空間の上に、壁画によって意味付けられたカトリコンとパナギア聖堂における西から東へ向かう空間が重なった。そこでは個々の空間として完結するように壁画が配置されながらも、同時に聖堂全体ではナオス、ナルテクス、北西礼拝室及び Space　A が壁画の配置によって関係付けられ、さらに、墓の近くにルカスが、その対面や背面には聖母マリアやキリストが描かれることにより、ルカスの墓を中心とする 3 次元のビザンティンの宗教的空間が構成された。
聖バルバラ聖堂とエウクティリオンが離れて建っていた 10 世紀後半には、ルカスの墓を礼拝するための、南から北へ向かう二聖堂の空間が構成されていたが、11 世紀前半にかけてパナギア聖堂とカトリコンが建設され、建築的には、ルカスの墓がある空間は二聖堂に従属する空間に変化した。しかし、ルカスの墓と繋がる壁画の配置によって西から東へ向かう空間が意味づけられ、ルカスの加護を求める信者の祈りを表現する神聖な建築的空間が形成されたのである。そして現在もルカスの墓は二聖堂の中心としてそこにあり続けている。
オシオス・ルカス修道院聖堂では、ナオスだけでなく北西礼拝室やナルテクスにおいても、各原理に従うように壁画が配置されていること、カトリコンとパナギア聖堂の間の東西軸線に沿ってルカスに関係する重要な壁画が配置されていること、南から北へ向かう二聖堂の空間の上に壁画の配置によって意味づけられた西から東へ向かう新たな二聖堂の空間が重なったこと、これら全てがルカスの墓の配置と関係していることを示し、聖堂におけるその墓の中心性を確認した。これらの墓と壁画との関係は、ルカスの遺体の移動と二聖堂の増改築及び接続によるものであり、墓が二聖堂に従属する空間にあったにも関わらず、建築と壁画の一体的な計画によって神聖な宗教的空間が創造された結果と考えている。
ネア・モニ修道院聖堂ではナオス、ベーマ、内ナルテクスにおける壁画の主題及び配置による空間構成の分析、考察を行った。ネア・モニ修道院聖堂では「三段階理論」「円環・相称性・中軸」の原理による装飾プログラムに従って、十二大祭を中心とする壁画が配置されている。そして「昇天」と「再臨」が個別の壁画によって、さらに別々の空間に描かれた複数の壁画によっても表現されている。すなわち聖堂の中心であるナオスとその奥のベーマ、前室である内ナルテクスにおいて、個々の空間として完結するように壁画が配置されながらも、同時に見ることはないが互いに関連する複数の壁画によって、聖堂全体で「昇天」と「再臨」を表現する 3 次元のビザンティンの宗教的空間が構成されている。
ナオスでは、その壁からドームへの移行部における意匠的、構造的に合理性のある接合部の納まりを犠牲にしながらも、皇帝の栄光をキリストの物語に重ね、宮廷典礼において「皇帝の勝利」を称えるために、信者に近い位置へ大画面で十二大祭の壁画を配置した可能性を指摘できる。宮廷典礼に対応する壁画の配置と「昇天」「再臨」の表現を優先するため、「受肉」はナオスとベーマではなく内ナルテクスで強調されている。この内ナルテクスは単にナオスに付属する前室ではなく、壁画の配置によってナオス、ベーマと繋がっている。
ネア・モニ修道院聖堂では「昇天」と「再臨」を表現する壁画の配置によってナオスとベーマ、内ナルテクスが繋がっていること、ナオスにおいて壁画の配置を目的として建築の計画変更が行われた可能性があること、内ナルテクスのドームで「受肉」を表現する西から東へ向かう空間

に、「昇天」「再臨」を表現する北から南へ向かう空間が重なっていること、これらによって内ナルテクスがその本来の意味を超えた重要性を持っていることを示した。ネア・モニ修道院聖堂における建築と壁画の関係は、聖母マリアに捧げられた聖堂として重要な教義を表現することを前提としながらも、皇帝コンスタンティノス・モノマコスの栄光を賛美する空間を実現するため、建築と壁画の総合によって神聖な宗教的空間が創造された結果と考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 猪股圭佑	４．巻 86
２．論文標題 オシオス・ルカス修道院聖堂における空間構成－墓と壁画との関係に着目して－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本建築学会計画系論文集	６．最初と最後の頁 2399-2409
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3130/aija.86.2399	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 猪股圭佑
２．発表標題 ネア･モニ修道院聖堂におけるキリスト教絵画による空間構成　その2 - 十二大祭の絵画の配置-
３．学会等名 日本建築学会大会学術講演会
４．発表年 2021年

１．発表者名 猪股圭佑
２．発表標題 ネア･モニ修道院聖堂におけるキリスト教絵画による空間構成　その１- キリスト教絵画の主題及び配置-
３．学会等名 日本建築学会大会学術講演会
４．発表年 2020年

１．発表者名 猪股圭佑
２．発表標題 オシオス･ルカス修道院聖堂におけるキリスト教絵画による空間構成　その３- キリスト教絵画の主題及び配置-
３．学会等名 日本建築学会大会学術講演会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関